
消せない絆

ちきんぽっとばい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消せない絆

【Nコード】

N5790Y

【作者名】

ちきんぼつとぱい

【あらすじ】

浴びる様に飲んだ翌朝、目覚めるとそこはよく知っている場所でありながら記憶に無い場所だった。そして隣にはすやすや眠る見知らぬ少女が。…俺は、一社会人としてやってはならない事をやらかしてしまったのか？

不定期更新。

1・寝乱れた朝に（前書き）

MLOのプロットを練ってる時に、母子家庭がどうか、時間軸がどうの、ゲーム内ではOKでもこれだけの歳の差だとリアルなら犯罪だよなーとか、とかいろいろ考えているうちにふっと思いついたお話です。

MLOとはまたかなり毛色の違うお話ですが、よかったですぞ。

1・寝乱れた朝に

—— 最悪だ。

どうやら俺は一社会人として最もやってはいけない事をしでかしてしまっただけらしい。

隣ですやすやと眠る少女を起こさぬよう注意深くベッドから起き上がると、昨夜床の上に脱ぎ散らかしたらしき服を拾い集め、そそくさと身に付ける。

…何がどうなってる？ 思い出せ。この娘は一体誰だ？

アルコールが抜けきらない頭でぼんやりと見知らぬ少女の寝顔を眺めつつ、俺は何とか記憶の糸を手繰り寄せようとした。

++++

話は2週間前に遡る。

その日、俺が徹夜明けの仕事からアパートに帰ってみると普段は滅多に使っていない家電の留守録ボタンがチカチカと点滅していた。メッセージの主は実家の近所の総合病院。

実家に1人残って暮らしていたお袋が突然倒れ、緊急外来に搬送さ

れたというものだった。

慌てて新幹線に飛び乗り地元に戻ったものの、結局俺が逢う事が出来たのは病院のベッドで既に冷たくなっていた姿だけ。

死因は脳卒中だった。

お袋が倒れた時、誰かが傍にいて直ぐに救急車を呼んでやる事さえ出来ていれば助かっていたのかも知れない。俺が傍にさえすれば…

大学進学を機に俺が家を出てから8年、今では盆と正月にたまに帰省するくらいでなかなか顔を合わせる機会も少なくなってしまうてはいたが、お袋はまだ45歳と言う事もあり、普通にバリバリ現役で働いていたし、特に持病なども無くいつも元気だった。

ほんの1ヶ月程前にもくだらない用で電話して来て延々と長話を聞かされたばかりだったのに。

…あまりにも突然で呆気ない死だった。

それから1週間はあつと言う間だった。

無我夢中で葬儀屋のスタッフや近所のおばさん連中に助けられつつ何とか葬儀から初七日までを終えると、役所で必要最低限の手続きだけを済ませ、俺はまた1人アパートへと戻って来た。

まだいろいろとやるべき事は残っていたが、社会人である以上、そう何日も続けて仕事を休む訳にもいかない。

後は日を改めてばちばち片付けていくしかないだろう。幸いにも消化しきれない有給休暇は山ほど残っていた。

ちなみに俺の勤務先は大手の下請けをメインにやってる小さな機械

設計事務所だ。

大学を出て勤め始めて4年、こなすべき仕事量は多く、毎日が納期に追われる日々だったが、アットホームで居心地のいい環境なので、今のところ仕事に関しての不満などは特に無い。

忌引明けの疲れきった顔で俺が職場に姿を現すと、周りの連中は心配して声を掛けて来たり、仕事の面でも何くれと便宜を図ってくれたりと随分気を遣ってくれていたようなのだが、この頃の事の記憶は随分曖昧で、具体的にどんな事があったのか俺はまるで思い出す事が出来ないままだ。

「佐山くん…ねえ佐山くん？　ほんとに大丈夫？」

そう優しく声を掛けてくれる松嶋さんの言葉すら耳に届いていなかったのだから、我ながら相当重症だったんだと思う。

隣のデスクの松嶋知佳さんは、俺が入社した当初から指導員として面倒を見てくれた先輩だ。

意志の強そうな黒いくりつとした瞳にぼつてりした唇、サラリとしたストレートの長い黒髪を持つ童顔美人で、飲み会で年の話が出るまではてつきり俺と同じか1つ上くらいの年だとばかり思っていた。「え？佐山くんって25でしょ？先輩なんだから同じ歳の訳ないじゃないー。私の方が上よ。何歳かは秘密！」などと言っていたので、おそらく俺より2、3歳上なんじゃないかと思う。

美人なのに気取ったところがなく、他愛のない話題でも彼女と話をしているだけで何だか幸せな気分になれた。

年上だとわかっていても、時々仕草が妙に幼くて可愛いと思える。

自覚した時には、もうどうしようもないくらい彼女に強く惹き付けられていて、何をやっていても視界の片隅の何処かにいつも彼女の姿を探している自分がいた。

俺にだってそれなりに過去にも付き合った彼女くらいいたし、恋愛に関して消極的と言う訳でもない。

むしろどっちかと言うとガツガツしてる方なんじゃないかと思う。

けれど、狭い職場だ。

下手に口説いて玉碎してしまうと目も当てられない。今の職場はかなり気に入ってるし、彼女との関係も悪化させるような真似はしたくない。

動くのは、もう少し確信が持てた時に。　　： そう思って自制していたのだ。

そんな彼女の姿ですら瞳に映らず、魂の抜けた空っぽの状態のまま与えられた仕事だけをただダラダラとこなして1週間。

： 明日には新幹線に乗ってまた実家にトンボ帰りだな。そうぼんやりと考えながら帰り支度をしていると、彼女に声を掛けられた。

「佐山くん！ いい加減にしなさいよ。

気持ちにはわからなくもないけど、そろそろ切り替えていかないか！ そんなんじゃ佐山くん自身が壊れちゃうよ？今日は金曜だし、とことん最後まで付き合っただけあげるから、気晴らしに飲みに行こう！ ねっ？」

さすがにこんな俺の姿を見るに見兼ねたのだろう。

： 俺自身？ そんなものもうとっくに壊れているようなものだ。そう思わないでも無かったが、やはり彼女の誘いは純粹に嬉しかった。

何より俺の事を励まそうと思っていてくれる気持ちそのものが。

2・ショットバーの夜

彼女と2人、騒がしい居酒屋で軽く飲みながら飯を食った後、ゆっくりと落ち着いて飲み直す為にショットバーへと移動した。

幼く見えても意外な事に松嶋さんはかなり酒に強い。

以前何度か一緒に飲んだ時に、酔わせてそのまま持ち帰りしてしまおうか？などと不埒な事を考えた事もあったのだが、下手にハイペースで飲むと先に俺の方が潰れてしまいそうになる。

自分自身アルコールは嫌いでは無かったし、そんなに弱い方でもないといと自負してはいるが、彼女の場合は底無しだ。

まあお互い大人だから、流れに身を任せると言うのもありだと思うが、多少はアルコールの力を借りる事があつたとしても、事に及ぶのならばやはり合意の上の方がいい。

いつも思うのだが、アルコールが入ると松嶋さんは堪らなく色づくなる。

彼女が酒好きなのは重々承知しているが、あまり他の男には見せない姿だ。

飲みに行くのは俺とだけにしてくれればいいのに。と思う。

「…ねえ佐山くんのお母さんってどんな人だったの？」

「うーん？どんなんて言われてもねえ。普通の人でしたよ？うち、親父が亡くなったのが俺がまだ8歳の時だったんで、物心付いた頃にはもう母1人子1人って感じてしたね。食ってく為に毎日お袋は結構遅くまで働いてたから、俺は家でいつも1人でぽつんとカップ麺とか食ってたような記憶しかないですよ」

「1人でカップ麺かあ…私も似たようなもんだったわ。」

頬杖を付いて彼女は遠い日の記憶に思いを馳せていた。

ほんのりと上気した頬に添えられた白くて長い指がしなやかで思わず触れたくなる。

「こんな話したら失礼だとは思っただけど、佐山くんのお母さんって、お父さんが亡くなっただ後ずっとお1人だったんだね。再婚とか考えたりしなかったのかな？佐山くんのお母さんはそれだけお父さんの事を愛してたのかな？」

「さあ？親とそんな話してた事ないですから。けど、そういやお袋時々親父の写真を取り出して来ては眺めてましたよ。男の影とかチラついた事も無かったし、案外松嶋さんの言う通りお袋は親父の事想ってたのかも知れないですね。」

カクテルグラスを片手にくるっとこっちに向き直ると、彼女はふふっと嬉しそうに微笑んだ。

「そうなんだ？素敵ねー。そんな風に想ってもらえたらお父さんも幸せよね。」

そう言いながらさりげなく髪を掻き上げて耳に掛ける仕草がまた堪らなく色っぽい。

「ねえ？佐山くんにも、そんな風に強く想う誰かっているの？」

潤んだ瞳で俺の顔を覗き込みながら核心に迫るような事を聞いて来る。

…誘っているんだろうか？

「…さあ？どうでしょう。いたとしても、今は母の事があつたばかりなんで、そこまで心を配れる余裕が無いかも知れません。」

目の前の彼女が欲しくて欲しくて堪らないのに、俺は敢えてはぐらかしてそんな風に答えた。

「そっか、そうよね。お母さんの事があつたばかりだものね。おかしな事聞いてごめんね」

何だか少し残念そうに顔を伏せているように見える。

俺は思わず手を伸ばして彼女の髪に触れると、「そう言う松嶋さんはどうなんですか？」と聞いた。

彼女はビクッと身体を震わせて俺を見上げると「…そうね。ずっと忘れられない人がいるわ」と呟く。

「なっ!？」

まさかここでそんな答えが返ってくるとは思っていなかったのだから、思わず声の上擦ってしまった。

「そう…なんですか。そんな風に松嶋さんに想ってもらえるなんて、その男も幸せですね。一体どんな奴ですか？」

内心荒れ狂う嫉妬を抑えつけながら、やっとの事で聞く。

「うーん…ひたむきで嘘が付けなくて、優しい人…かな？　すごく好きだったんだけど、その人も私以外の誰かの事を強く想っている人だった。最後にはやっと気持ちを通じ合う事が出来たかな？　って思ったんだけど、ある日突然あっさりと姿を消しちゃった。…捨てられちゃったんだよね。」

そう言っただけで彼女は少し寂しそうに笑うと声を詰まらせた。

「…ごめん。ちょっとお化粧直して来るね。」

少し鼻声になった彼女は立ち上がると、足早に店の奥にある化粧室へと去って行く。

俺はそのまま彼女の後を追って席を立つと、腕をぐいっと掴んで化粧室の中へと引きずり込んだ。

「えっ？　何っ！？　佐山くん、どうして？」

狼狽した彼女の顎を掴んで上向かせると、その瞼にはうつすらと涙が滲んでいる。

…その男の事を思い出して、泣いてんのか？
クソッ！

無性に腹が立って彼女の後頭部を手の平で強く引き寄せると、その唇に荒々しく口付けた。

壁に押さえつけて動きを封じ、強引に唇を舌で抉じ開けると口内を蹂躪する。

逃れようとする彼女の舌を執拗に追い掛け絡め取りながら、指で首筋から耳朶へとゆっくりと撫で上げると、彼女の身体がビクンと小さく撥ねた。

「ふあ…あ」

彼女は俺の胸に両手を突き、何とか押し除けようともがいていた。そんな彼女を宥めるように首筋から髪に指を入れ優しく撫でる。

次第に息が上がって来た彼女の気配に気付いて少し唇を離すと、糸を引いて垂れた唾液のしずくがやけに淫らだった。

「佐山くん…だめ」

その言葉を見無視して彼女の眦に浮かんだ涙の雫を舌で舐め取り、耳朶を軽く噛む。

甘い反応を返しながら徐々に弛緩していく彼女の胸に手を伸ばすと、やんわりと揉みしだいた。

「…ああん」

崩れ落ちそうになる彼女を抱き留めながら、首筋へと舌を這わせる。

「…佐山くん。ごめんなさい。お願いだから本当にやめて。」

突然低くなった彼女の声に、俺は冷や水を浴びせられたような気分
でのろのろと顔を上げる。

彼女の顔からはさっきまでの甘さは綺麗に消え、ただ哀しそうな目
がじつと俺の事を見つめていた。

2・ショットバーの夜（後書き）

このくらいならギリギリOK？

今後直接的なエロシーンを書く事があれば、ムーンライトノベルスの方にもいずれ。

3・親父の書斎

翌日、実家へと戻る新幹線の中で俺は自問自答していた。

あの時、確かに途中までは彼女は俺を受け入れようとしてくれたのだと思う。

アルコールのせいであんなに流されただけとは考えたく無かった。

今となつては自惚れたつたのかも知れないが、俺は普段自分が彼女を見ていたのと同じくらい彼女からも見られていた事に気付いていた。

最初是指導員として業務上気に掛けてくれているからなのかとも思つた。

けれど、仕事を離れ仲間内で飯を食に行つた時、喫煙コーナーで一服している時、飲み会の時……。ふと視線を感じて振り向くと、いつもそこには彼女がいた。

確信こそ無かつたが、少なくとも憎からずは想われているのだろうという気持ちがあつた。

だからあの後、哀しげに潤んだ瞳で俺を見上げてくる彼女を俺は問い詰めたのだ。

「こんなのは嫌ですか？…俺はあなたの事が好きです。

どうしても昔の男の方がいいんですか？でも、そいつはあなたの事あつさり捨てていった男なんでしょう？ そんなヤツの事はもう忘れて、俺にすればいい。」

彼女は大きく目を見開くと、しばらく俺の事をじつと見つめ呟いた。

「…ごめんなさい。やっぱり私、忘れる事なんて出来ない。
今のあなたがどんなに私の事を想ってくれたとしても、やっぱり私
が彼の事を大切に想う気持ちは消す事は出来ないわ。」

そう言つて目線を外すと、「ごめん。今日はもう帰るね」そう言い
残し、呆然と立ち尽くす俺を置いて彼女は足早に店を出て行った。

++++

…あぁっ！クソッ！

ムシャクシャした気持ちのまま実家に辿り着き、ガチャガチャと玄
関の鍵を回すと乱暴にドアを蹴り開けた。

ドアノブに刺さったまま鍵に付いている古い根付が大きく揺れて小
さな鈴がチリチリと音を立てる。

ただでさえお袋の事で精神的に参っているところに失恋の痛手は堪
えた。

どこにも逃す事が出来ない鬱々とした怒りの衝動が体内を廻ってい
る。

ボタン！と大きな音を立てて扉を閉めた後は、誰もいない広い家の
中の静けさが却って増したような気がした。

扉から引き抜いた鍵をポケットに仕舞い込もうとして、ふと持ち上
げて眺める。

チリチリと音を立てている根付は、随分昔にお袋が付けてくれたも

のだ。

色褪せた組紐の先には、小さな鈴と一緒にガラス製の黒と白の2匹の猫が並んでいる。

「勘助は、すぐに物を無くすんだから！　一番大切な我が家の鍵だけは絶対に無くしちゃだめよ？」

そんな注意をされた端から、まだ小学生のガキだった当時の俺はあっさりと家の鍵を無くしてしまい、冬の夜空の下ぶるぶると震えながらじつと軒先に蹲り、遅い勤めからお袋が帰って来るのを1人待っていたのを思い出す。

その後、母に付けられたのがこの小さな鈴の付いた猫の根付だった。

しばらくぼんやりと玄関先に立っていた俺は、のろのろと階段を上がった。

懐かしい匂いのする自分の部屋にドサツと荷物を下ろすと、ベッドの上にゴロンと横になる。

おそらく亡くなる直前までこの部屋もお袋が掃除してくれていたのだろう。今回の事で急遽帰省する事になるまで長い間使われていなかった筈なのに、不思議とホコリの匂いはしなかった。

…この家もどうするか考えなきゃな。

松嶋さんとは気不味い関係になってしまったが、今の所、職を変えらるつもりなどは毛頭無い。

彼女との事はおいおい何とかするとして、やはりあっちに住み続ける限りはこの家は処分するなり何なり考えなくてはならないだろう。

とは言うものの、長年人が住んでいた一軒家だ。慎ましい生活をしていたとは言え、それなりに細々した物で溢れている。

この広い家の一体何処から手を付けたものやら… 俺はベッドの上で大きく溜息を吐いた。

+ + + +

最初に手を付ける事にしたのは、親父の書斎だった。

さすがにお袋の気配が色濃く残っている生活スペースには、到底手を付ける気になれなかったのだ。

親父が亡くなったのはもう17年も前の事だったが、その頃からこの部屋はずっとそのままになっている。

生前親父がどんな職業に就いていたのかもよく知らなかったが、とにかく本が溢れ返った部屋で、下手に中で動くと積み上げられた本が雪崩を起してしまう。

お袋はたまにこの部屋に入って本に積もった埃を払ったりもしていたようだが、俺はガキの頃一度本の山の下敷きになって以来、この部屋には立ち入らないようにしていた。

汗だくになりながら、古い本を次々とダンボールに詰めていく。

それなりに価値のある書籍もあつたのかも知れないが、これだけ量があると選別している余裕もない。

丸一日掛けてようやく半分ほど片付いた分を買取業者に回収に来て貰った後、俺は親父の部屋の床に倒れ込んだ。

… 疲れた。

このところ色んな事があり過ぎた。

寝転がったまま、半分だけ片付いた親父の部屋をぼんやりと眺める。本の影になって今まで見えなかった壁に、1枚の絵が掛けられているのが見えた。

静物画の油絵だ。

おそらくレプリカだろうが、ひよつとするとそれなりに価値のあるものかも知れない。

俺はのろのろと立ち上がると、その絵の額に手を掛けた。

――カサリ

…なんだ？

額縁の後ろから落ちたのは色褪せた茶封筒だった。

封筒を開けると、俺によく似た筆跡で書かれた短い手紙が1通入っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

勘助へ

この金はお前が本当に困った時、よく考えて使うように。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

そう言えばお袋に言われた事がある。

「勘助の字はほんとお父さんにそっくりよね。お父さんに字を習ったって訳でもないのに不思議ね。やっぱり遺伝ってあるのかしら？」

手紙と一緒に封筒に入っていたのは、福沢諭吉が5枚。

8歳のガキだった俺に遺すにしては大金だったのかも知れないが、25の社会人に成長した俺から見ると亡くなった両親の葬式代の足しにもなりやしないハシタ金に思えた。

…親父の奴、一体どういふつもりだったんだろうか？

4・路地裏の出会い

俺はひとしきり福沢諭吉の顔と親父の手紙を見比べた後、ジーンズのズボンに無造作に捻じ込んだ。

クソッ！親父の奴、一体どういつもりなんだ？

5万円という中途半端な金額に無性に腹が立つ。何だか「お前の価値は金額にすればその程度って事だ。」と言われているような気がした。

…馬鹿にしゃがって！

ムシャクシャして積み上げられた本の山を蹴り飛ばす。

ぐらつと本が奥へと倒れ込んで、ドミノ倒しのように周囲の山を巻き込んで残った本の山全てがゆっくりと崩れ落ちた。

……………。

自分がやった事のせいだとわかっているだけにやり場の無い怒りにまたムシャクシャしてくる。

この家にいるのは俺1人つきりだ。

今後とも気まぐれな誰かが助けに現れる。などという事は起こらないだろう。

当然の事ながら崩れ去った本の山を片付けるのは俺自身だ。

…あまりにも不毛過ぎる。

「あ—————！」

馬鹿馬鹿しくなって、俺は埃だらけの親父の部屋の床にごろんと大

の字に寝転がった。

クソクソクソクソッ！ 一体どうしろっていうんだ。

天井のシミを眺めながら、しばらくぼんやりしていた。

…そっぴや親父の奴こんな本だらけの部屋の一体どこで寝てたんだろっ？などと、どうでもいい事を考える。

ベッドを置いていた形跡も、布団を敷いていた形跡も無い。おそろくお袋と一緒に居間で寝ていたのだろう。…俺には全くその記憶は無いが。

ぐーきゅるきゅるきゅー

…腹が鳴った。

よく考えてみると、今朝新幹線の中でおにぎりを1個食ったつきり、何も食ってなかった。

あー面倒くせえ。どうすっかな？

今更、何か作ろうと言う気にはとてもなれない。コンビニで弁当買って気分でも無い。

ふと、ケツのポケットに収まった5万円の事を思い出した。

…気晴らしに飲みにも行くか。

俺はのろのろと立ち上がると、駅裏の飲み屋街に向かった。

+ + + +

…この辺りも随分変わったな。

地元を出て8年になる。そりゃ変わりもするだろう。

と言っても、8年前の俺は正々堂々と酒を飲めるような歳じゃなかったからこの辺りにはあまり縁が無かったし、実際のところ詳しい事を覚えていない訳でもなかった。

店を選ぶのも面倒だったので、適当に一番最初に目についた炉端焼きの店に入った。

壁に張られたお品書きは茶色く煤けていて、店全体が古ぼけた雰囲気だ。

店内には、中年のサラリーマンの客が1組と白髪交じりの店の親爺が1人いるきりだった。

「へいいらっしゃい。お客さん何にしましょう?」

「…日本酒。後、お任せでいいからなんか適当に摘むもん出してくれ」

「あいよ」

俺はそれだけ言うと、後はただひたすら浴びるように飲んだ。

+ + + +

気が付いた時には、うちの近所の路地裏に1人しゃがみ込んでいた。店で飲み始めてからここまでの記憶が全く無い。

こんなになるまで飲んだのは初めてだった。

我ながらおかしくなって、立ち上がって大声で笑い出す。

「はははははははは…ひい…おかしい。俺って馬鹿じゃねーの？」

ひとしきり笑った後は虚しくなって、じんわりと涙が滲んで来た。

…そういや、まだ泣いていなかった。

俺は肉親を全て失い、この世でたった一人つきりになってしまった。恋にも破れた。

これって、男の俺が泣いたって許されるんじゃない？ 別に罰当たらないよな？

そう思った途端、涙がボロボロと溢れ出て来て止まらなくなった。

路地裏の花壇の縁石に座り込み、ただひたすら涙を流す。

大人になってから泣いたのは随分久しぶりだった。

声を殺して泣いていたつもりだったのに、いつの間にか口から嗚咽が漏れていた。

「…お兄さん、どうしたの？何か悲しい事があったの？どこか痛いのか？」

そんな声にふと顔を上げると、そこには1人の少女が佇んでいた。

…なんだこいつ？

いい大人が散々飲んで帰って来たような時間だ。とつくに深夜になつていた。

少なくとも子供がウロチヨロしていいような時間帯じゃない。無視して泣いていると、下から顔を覗きこまれてしまった。

「ねえ？お兄さん、本当に大丈夫？そんなに悲しいの？泣かないで私がそばにいてあげる。」

少女はそう言うと、タン！と踵を鳴らし俺の隣に座った。

「何なんだお前？」

「ん？…私、ともか。17歳。

私もね。お兄さんと一緒ですごく悲しい事があってさっきまで泣いてたんだ！。

行くところが無くって。お金も無いし、どうしよう？って途方に暮れてたの。」

…こいつ、家出娘か？

「あ、今お兄さん、私の事『こいつ、家出娘か？』って思ったでしょ？半分正解で半分不正解ってとこだよ」

「なんだそれ？」

「家を出て来たって言うのはホント。けど、自分の意思で出て来た訳じゃないの。『出て行け！ここにはお前の居場所は無いつ』って追い出されちゃった。」

「はあ！？」

いつの間にか俺の涙は止まっていた。少女の話す事はあまりにも予想外でついつい引き込まれてしまっていたのだ。

…にしても、少女の語る事が事実だとしたら、とんでもない親だ。いや、年頃の少女にそんな扱いをするくらいだ。実際の親じゃなく、親戚か何かなのかも知れない。

「…だからね。私本当に行くところが無いの。良かったらお兄さんの家に連れて行ってくれない？」

「はあ！？」

こいつ馬鹿じゃなかるうか。自分が言ってる事の意味わかってるんだらうか？

そんな事したら、こっちが犯罪者扱いされてしまう。

おとなしく警察にでも行って保護してもらうのが筋ってもんだらう。

「あ、今警察に行けとか思ったでしょ？…無理なの。そんな事したら、あの人達が捕まっちゃう。」

あの人達に私は捨てられちゃったんだけど、私はあの人達の事を守りたいの。」

… どれだけお人好しなんだ。

「お兄さんが私を家に連れて行くって事の意味もちゃんとわかってるよ？ 私の事は親戚の子かなんかだって言ってくれればいいから。私、うまく合わせるよ？」

必要なら近所の人とかに見つかったりしないように、きちんと隠れて家の中でじっとしてるから。」

ぴょんと立ち上がると俺の正面に立ち、お辞儀をしながら少女はこう言った。

「… だからお願い。私の事連れて帰って？ お礼は体で払います。」

そして俺の瞳をじっと覗き込んで黙って俺の返事を待っていた。

俺はようやく少女の顔をまともに見て、固まってしまった。

彼女の顔は俺がたった1日前失恋した相手、松嶋さんによく似ていたのだ。

… ごくり。思わず唾を飲み込んでしまった。

こいつが欲しい。

1日や2日泊めるくらいなら、バレやしねえか。
…合意なんだし、
いいよな？

悪魔の囁きに俺は思わず頷いていた。

5 ・おにぎりと牛乳（前書き）

すいません。間違えて書きかけで公開されてしまっていました。
再アップです。

5・おにぎりと牛乳

…以上、回想終了。

残念ながら、その後はどこをどうやって帰って来たのか、少女と本当にイタしたのかすらよく覚えていない。

おそらく相当アルコールが回っていたのだろう。今も二日酔いのせいで頭が割れるように痛かった。

後は少女を起こして本人に話を聞いてみるしか無い。

「おい、起きろ…おい」

「んー？まだ眠いよう。もうちょっと寝かせて。」

だあ！埒が明かない。…そういや、こいつ名前なんだったっけ？

「えーと、ももか？ 起きろっ」

「んー ももかじゃないよ。ともか。」

「ああもうどっちでもいい。いいから起きろ。」

「ん。そうだね。どっちでもいいっか。勘助がそう言うなら今日から私はももか。」

そう言つと、ベッドの上にちょこんと座つてにへらつと笑った。その姿は案の定と言つか何と言つか、一糸纏わぬ姿である。

…やっぱやったのか？ 俺も起きた時、裸だったしな。

「勘助どしたの？ね。まだ眠いよ。一緒に寝よっ？」

そう言つてベッドの上から腕を伸ばすと、ぎゅっと引き寄せられる。

ここまで状況証拠が揃つてしまつていては、実際にはやっていなか
つたとしても今更言い逃れのしようも無いだろう。

…もう何でもいいか。

俺は捨て鉢な気分で少女を押し倒すと、そのまま何も考えないよう
にしてがむしやらに抱いた。

++++

「…ねえ？勘助。勘助つてば。起きてよ。」

少女に何度も揺さぶられて、俺はゆっくりと覚醒した。
どうやらあの後また眠つてしまつていたらしい。

「かんすけえー！おなかすいたよう」

甘えた声で少女がすがりついて来る。

「あーもう。わあつたわあつた。」

ちらりと時計を見ると、もうとっくに昼も過ぎていた。

…そりゃ腹も減るはずだ。可愛そうな事したな。

「とりあえずコンビニでなんか買って来てやつから、ももかはシャワー浴びといたら？」

バッグから着替えを取り出しながら言うと、ももかは不思議そうに俺の手元を覗き込んでいた。

「ん？何？」

「ううん。何でもない。鮭のおにぎり買って来てね。」

ぶるぶると首を振ると、につこり笑ってそんな事を言った。

「わかった。ちょっと待ってろ」

手早く着替えて家を出る。

玄関の門扉を開いたところで、お向かいの青木さんと目があつた。お袋の葬式では、このおばさんにも随分と親身になっていろいろと助けてもらった。

いくら礼を言っても言い切れないような人だ。

ぺこりと会釈をして「こんにちわ」と挨拶をする。

青木さんは一瞬怪訝そうな顔をした後、「…こんにちわ」と小さく挨拶を返して、スツと家の中に入っていつてしまった。

…ん？　なんか俺やらかしたか？

あ！もしかすると、昨日の晩もかを連れ込んだところを見られていたんだろうか。

だとしたらマズイな。

昨日今日の付き合いじゃないから、さすがに通報まではされないとは思うが、近所の噂ぐらいにはなってしまうかも知れない。

後でまた顔を合わせる事があつたら、適当に親戚の子だとか何とか言つて誤魔化して置く必要がありそうだな。

そんな事を考えながら、ぶらぶらとコンビニまで歩く。

確かこの右の角を曲がつた先にセブンイ。ブンがあつたはずだ。

そう思つていたのに、お目当ての場所に広がつていたのは何も無い空き地だつた。

…なんだ。潰れたのか？

こんな片田舎だ。昔から開店はしてみたものの採算が合わなくてあつさり潰れて行くような店は多かつた。

にしても、8年前に比べるとこの辺りもだいたいぶ店が少なくなつたような気がする。

ここまで古臭い町だつたつけか？　しばらく見ない間にすっかりさびれちまつたな。

仕方なしにそのまま足を延ばして、バイパス沿いにある小さなスーパーで買い物を済ませる事にする。

…やれやれ。こんな遠出する事になるんなら、チャリ使つとけば良かった。

ももかのヤツ、腹すかして待つてんだろな。早いとこ帰つてやらないと。

惣菜売り場でおにぎりを数個適当に見つくり、ついでに当面の食料をまとめて買い込む事にする。

肉や野菜、カップ？などを大量にかごに放り込んで、牛乳売り場ま

で来た時、ふと青と白のパッケージが目にとまった。

…お？ 印牛乳じゃん。懐かしいな。まだこのパッケージ売ってたのか。

印牛乳は集団食中毒事件や牛肉偽装事件などの不祥事でブランドイメージが失墜して、現在では赤いパッケージのメ。ミルクというブランド名で発売されている牛乳だ。

噂によると、現在でも北海道ではこの青いパッケージの 印牛乳が売られているらしいのだが、地域限定商品をレトロ感覚で再発売した。ってところだろうか？

そう思っただけなくパッケージを手にとって見てぎよっとする。
賞味期限が 98・12・10 となっていた。

…何だこれ！？ 確実に腐ってるだろ！

気持ち悪くなっと思わず棚に戻した後、他のメーカーの物を手にとってみてまたぎよっとしてしまう。

なっ！？

今度の商品は賞味期限が 98・12・09 になっていた。

慌てて棚にある他の商品もチェックしてみる。

どれもこれも似たような日付ばかりで、まともなものが一つも無い。

…どうなってるんだここの店は？ 腐ったもんばかり並べてんのか？

ふと気になって、持っているカゴの中に入れていた他のものもチェックしてみる。

やはり似たような日付のものばかりだった。

だが、見る限り鮮度には問題無いように見える。

訳がわからないまま会計を済ませ、俺は足早に家へと戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5790y/>

消せない絆

2011年12月6日23時46分発行